

『パイロン』 試論

A Study of *Pylon*

山下 昇

1

ウィリアム・フォークナー (William Faulkner 1897-1962) の『パイロン』 (*Pylon*, 1935) は、彼の作品群の主たる舞台であるミシシッピ州ヨクナパトゥファ郡の外に場所設定がなされていることもあって、論じられることが少ない小説の一つであり、作品としての評価もあまり高くない。ワゴナーや花本氏のようにもっと正当に評価されるべきだと主張する人もいるが、一般的にはこの作品の評価は低く、ハウやヴォルペのように失敗作だと断言する者もある。しかしこの物語をとりあげて論じている者の多くは、例えばミルゲイトやブルックスのように、これがフォークナーの作品群のうちではマイナーなものであることを認めながらも、他の作品との関連においてあるいはこの作品独自でもそれなりの意義を見出そうとしている。筆者もこの立場である。

作者自身によれば、『アブサロム、アブサロム!』 (*Absalom, Absalom!*, 1936)⁸⁾ の執筆に行き詰まって、気分転換のために『パイロン』を書いたとのことだが⁹⁾、それではいかなる意味で『パイロン』は『アブサロム!』執筆の息抜きになったのだろうか。又、気分転換として書いたこの小説で何をつかむことができ作者は『アブサロム!』の障壁を乗り越えることが可能になったのだろうか。このことを、『パイロン』の主題や作品構造などを分析することによって考えてみるのがこの小論の目的である。

2

『パイロン』は、フォークナーのいくつかの物語系列のうちのいわゆる〈飛行士物語〉の系列に属している。第一次世界大戦中のカナダ空軍における訓練の経験などもあり、この種の物語は作者お気に入りのものの一つであった。それ故先行する短篇などに飛行士物語もいくつかあり、オコナー、ミルゲイト、マクミランらが、「名誉」 (“Honor”, 1930)¹⁰⁾¹¹⁾¹²⁾

「死の宙づり」(“Death Drag”, 1932)¹³⁾、「星までも」(“Ad Astra”, 1931)¹⁴⁾、「みな死んでしまった飛行士たち」(“All the Dead Pilots”, 1931)¹⁵⁾、などをとりあげてこの小説との関連性をさぐっている。更に大橋氏は、「急旋回ポート」(“Turn About”, 1932)¹⁶⁾、「厳重警戒大至急」(“With Caution and Dispatch”, 未完)¹⁷⁾、「この種の勇氣」(“This Kind of Courage”, 未発表)¹⁸⁾、との関連にまで言及している。これらの諸短篇に『サートリス』(Sartoris, 1927)も加えてフォークナーの〈飛行士物語〉のなかの一冊として『パイロン』を位置づけて読む読み方も可能であるが、この小論の主旨ではないので別稿を俟つこととしたい。この際重要なことは、とりあえずこの小説の主人公たちが飛行士であるという事であろう。このことはもう一人の主要な人物がレポーター(新聞記者)であるということとともに大変重要な意味合いをもっていると思われるので後ほど検討することとしたい。

この小説は1935年2月14日(木)から2月18日(月)にかけての5日間、フランシアナ州ニュー・ヴァロアの町(New Valois, Franciana)とその町のファインマン空港(Feinman Airport)を舞台とした飛行士たちと一人の新聞記者(Reporter)の出会い(と別れ)の物語として設定されている。ただこの作品がレポーターの物語か飛行士たちの物語かということをめぐるには意見が分かれている。論者の多くはこれをレポーターの物語であるとしている。しかしレポーターの成長物語と考える人たちのなかでも評価は二分している。ヴィカリーのように、レポーターは成長せず、彼の認識の不充分さが作品のあいまいさの根幹だと述べるものもあり²⁰⁾、花本氏のように、作品のあいまいな印象は現代社会の混沌を反映したもので、レポーターはその現代社会の混迷を認識するに至ったのだから成功していると主張する人もいる²²⁾。なかにはマクミランのようにレポーターの人間の成長を高く評価しているものさえある²³⁾。さすがにこの解釈は行き過ぎと思えるし、ルバスバーグなどもこのような見解には疑問をなげかけている²⁴⁾。

レポーターの成長であるか否かということとは別に、基本的性格としてレポーターはロマンチックな理想主義者であるとブルックスは定義し、一連のフォークナーの作品に登場する同類の人物、即ちホレス・ベンボウ(Horace Benbow)やギャヴィン・スティヴンス(Gavin Stevens)と彼との相同、相異関係を追求している²⁵⁾。この点はいへん重要な指摘であり、この言及がクエンティン・コンプソン(Quentin Compson)に及んでいないことに注目しなければならない。又、他の批評家たちのなかでこのレポーターの役割を『八月の光』(Light in August, 1932)のパイロン・バンチ(Byron Bunch)にたとえているものがある²⁶⁾。この場合もクエンティンにはたとえられていないのである。ということは『パイロン』の主要人物の一人であり、主要な語り手のうちの一人であるともいえるレポーターは、『アブサロム!』(と『響きと怒り』)の主要人物、主たるナレーターの中の一人であるクエンティンとは異なる性格、役割を担っているということである。この点は

二作品のあいだの相異点を解明する鍵となりそうである。

これに対して『パイロン』が飛行士たちの物語だと主張するものは意外と少ない。この立場に立つ急先鋒はマッケルラスである。彼はこれはラヴァーン²⁷⁾ (Lavern) の物語であり、彼女が如何に作品の中心であるかということ力を説く。彼によれば、ラヴァーンはちょうど『響きと怒り』(*The Sound and the Fury*, 1929) のキャディー (Caddy), 『アブサロム!』のサトペン (Sutpen) と同様に、作品の(不在の)中心である。こうした点で『パイロン』はこの二作品と共通するものがあると彼は主張している。

力点と評価は異なるがアダムズもこれを単純にレポーターの物語とは言えなくてラヴァーンが重要であると指摘している²⁸⁾。むしろこの小説の基本構図は「レポーター対ラヴァーン」であるというのが彼の立場である。

このように『パイロン』が一体誰の物語であるかということ意見が分かれるのだが、これはもっぱら作品の構成をどう見るのかということによるわけで、その見方によって主題のとらえ方、作品としての成功、不成功という判断もかわってくるわけである。又、『パイロン』が失敗作だとかマイナーな作品だとしてあまり論じられない理由の一端は、作品構成からくるあいまいな印象によるということが言えるかも知れない。それならばこの作品の構成は一体どうなっていて、何を主題として表わしているのか、又その意図は十分に達成されているのかどうかということを以下で検討してみよう。

3

『パイロン』は7つの章から成っている。各章にはそれぞれタイトルがつけられているが、各章の切れ目が時間の切れ目と合致している訳ではない。物語は5日間にわたっているが一日一日が章ごとに区切られているのではない。2月14日(木)は第1章から第3章にかけて、2月15日(金)が第3章から第5章まで、2月16日(土)は第5章から第6章にかけて、2月17日(日)が第6章から第7章にかけて、2月18日(月)は第7章となっている。つまり、第1章と第4章を除いて、他の全ての章は夕方又は夜から始まり、第3章以外は夕方又は夜で終わっている。それ故に夜の場面が非常に多いことは一目瞭然である。飛行士たちが通常活動している昼の部分とともに、彼らの私生活の部分で普通はよく知られない夜の部分を特に詳しく描き出しているのがこの物語の特色である。

日の出とともに一日が始まり日没とともに一日が終るという自然な時間の区切りをこの物語がとっていないということは、時間の切れ目というものがこの作品においては二義的な重要性しかもたないということである。それは眠ることを知らない24時間都市といわれる現代世界の相貌の一つであり、そうした面がこの作品の章立てに反映しているといえよう。

この連続的に流れる時間は、現在時でしかもほとんどクロノロジカルである。しかしそこに時折挿話的に、登場人物の幾人かについての過去の時間が挿入されてくる。即ち、第3章におけるレポーターの母親のエピソード、第5章ラヴァーンの最初のパラシュート降下、第6章ロジャー（Roger Shumann）の子供時代、ラヴァーンの少女時代等のエピソードである。第3章のレポーターの母親の場合、形式上は客観的な語り手によるものであるが、実質的には編集長ハグッド（Hagood）が飛行士グループの一人ジグズ（Jiggs）に語っている。第5章のエピソードは客観的な語り手による語り、第6章のものはジグズがレポーターに語っているものとなっている。これらの挿話は、これがなければ非常に平板であいまいな人物像となってしまうレポーターの母親やラヴァーンやロジャーの人物造形のうえで、外見の描写とともに生いたちという過去の集積をつけ加えることによって、人物像に厚みと具体性を与えている。これと対照的に全く具体的な人物造形がなされていないのがレポーターである。彼の場合むしろ人物造形を拒否しているようではさえない。しかもレポーターには名前があるにもかかわらず、一貫して読者に対して示されない。この点に関して大橋氏はレポーターはエヴリマン²⁹⁾なのだと主張している。確かにリアリズム流の人物造形を拒否し、エリオット風のうつろな人間としてモダニスティックな手法でレポーターは描出されている。又リアリズム小説流のイニシエーションの過程を経て成長する人物とも彼は必ずしもなっていない。それはレポーターが現代のエヴリマンの一人であるという特徴であるとともに、この人物に課せられた職業としてのレポーターという性格にも由来すると考えられる。

レポーターとは何だろうか。レポーターは事件を報道する人物である。しかしこのレポーターは事件ではなく、人物に魅せられている。飛行士たちの三角関係に興味をそそられているレポーターに対して編集長は、“… what I am paying you to bring back here is not what you think about somebody out there nor what you heard about somebody out there nor even what you saw : I expect you to come in here tomorrow night with an accurate account of everything that occurs out there tomorrow …” (P, 48.) と述べ、それはニュースではないと一蹴する。つまりこの人物はレポーターとしての役割を果たすべき職業についていながら、ライター（作家）としての機能を果たしたいという思いにとりつかれているのである。そうした彼にとって飛行士たちは魅力的な存在である。彼らは空中にあって鳥や虫のように自由に飛ぶことが職業である。しかも空という空白に思うままに軌跡を描くことができる＝束縛されずに好きなことが書ける、理想の存在としてレポーターの心をひきつけるのである。しかも彼らは飛行士のなかでもとりわけ自由な曲芸飛行士たちで、スピードへの挑戦、自己の操縦技術への挑戦が使命である（とレポーターの目には映っている）。しかしレポーターはそのような飛行士たちの動機が生活のための賞金獲得であることを最後まで理解しようとしな。ここにレポーターの一

人よがりな性格、成長しない理由がある。

レポーターのこの性格は、ブルックスが先に指摘しているように、ホレス・ベンボウ、ギャヴィン・スティヴンスらに共通するロマンチックな理想主義者のものであり、ホレスやギャヴィンが『サンクチュアリ』(Sanctuary, 1931)や『スノープス3部作』(Snopes Trilogy, 1940-1958)において現実を認識し得ないのと同様の軌跡を彼は追うこととなる。

編集長ハグッドが主張するように、新聞社が必要としているのは“… not fiction, not even Nobel Prize fiction, but news.”(P, 48.)であるが、レポーターは職業上の役割と自己の願望との間にひきさかれている。このアンビヴァレンスが飛行士たちの出現によって増幅されるのがこの物語のモチーフである。一方彼はレポーターとしてはかなりその職務を果たしている。ハグッドが述べるように、この人物は事件を匂ぎつけ、その現場に必ずといっていいほど居合わせる。しかし彼は記事を書かない。ほとんどの場合、電話を通じて報告するのみである。つまり彼はあくまでもライターとして書くことを目指しているのである。最後の場面に至ってこのレポーターが書いた記事が二通示され、アルバイトの少年はこれを、“not only news but the beginning of literature”(P, 323.)と認知するが、これはあくまでもこの少年の抱く感慨であり、読者には必ずしもそのように伝わってこない。この失敗又は非力さが、飛行士たちの実体を把握することにレポーターが成功し得ない理由がある。むしろその記事は本人の意図とは裏腹に、彼しか知りえなかったスクープ記事(オード[Ord]が湖水に花輪をなげて別れをしたことやロジャーの出生地等)となっていることができる。うがった見方をすれば、このスクープという利己的な目的のために彼は終始飛行士たちをつけまわしていたのではないかとさえ考えることが可能である。確かに禁酒中は彼はそうした目的をもたずに飛行士たちのために尽力しているように見える。特にロジャーのために代りの飛行機を手に入れ、バランスをとるおもりがわりに彼がロジャーとともに飛行するエピソードでは、明らかに彼はその他の場面とは異なっている。つまり一時的にはあれ自らが飛行士の一員となり飛行することによって彼は一時的な解放を得ているのである。しかし結局それは一時的なことにすぎず、地上に舞い降りて後は再び元の状態、空虚な都市生活を送る現代のエヴリマンへと戻るのである。

元来彼の職業である新聞記者という仕事においては客観的な報道＝無名性が要求されるのであり、一刻を争う時間との勝負のもっとも励しい職業の一つである。しかしその記事そのものに関して言えば、“… upon the same boxheadings, the identical from day to day … distinguishable from one day to another not by what they did but by the single brief typeline beneath the paper’s registered name.”(P, 212.)というように単なるパターンの虚しいくりかえしである。随所に引用される新聞記事の見出しやパンフレットの中味が人目をひきつけるが、それらは無感動に示されたり、単に捨て置かれているように所在なげである。

『パイロン』には、ドス・パソス (Dos Passos) の『U.S.A.』(U.S.A., 1938) のニュース・リールを想起させる新聞の見出しなどが4種類記号的に数度にわたって用いられている。その①は新聞の見出しである。ゴチック体でしかも時折断片的に示されたり、くりかえし示さざりたりするこれらの見出しは、視覚的な衝激を与えはするが、記事そのものは示されないこともあって、その背後に生きた個々人の生が見えてこない。単なる事件の報告である。**FARMERS REFUSE BANKERS DENY STRIKERS DEMAND** … (P, 110.) 等の見出しにはニュース・リール同様に1930年代という時代背景を匂わせる面もあるが、むしろ断片的な印象の強さの方が勝っている。②はFの頭文字である。空港の創立者ファインマン氏の勢力を誇示するために用いられているこの文字は、滑走路の形にまで適用され、権力欲と商業主義の支配の象徴として機能している。③はプログラムである。空を自由に飛びまわり、スピードと自己の技能への挑戦である飛行士たちの解放された行動であるべき曲芸飛行までが、時間の順序に実行されるべきものとして管理下におかれ、日常化されたものとして提示される。一日目の飛行に失敗して死亡した飛行士の演目は翌日のプログラムでは削除されるのみならず、新たに刷り直されて痕跡さえとどめなく消されてしまう。④レポーターの残した二通の原稿。レポーターの4日間にわたる経験、一人の飛行士の死と「家族」の離散という重い経験も、文字として描かれてしまえば、(まして新聞の原稿となってしまえば、名前と日付をかえれば誰の物語にでもなりうる) 単なる数頁の白い紙の上の線になってしまう。これらの断片化され、記号化されたライティングは、同様に断片化され、孤立した現代人の生の象徴としてこの作品では機能している。

これに対抗しているのは、生身の人間の言葉である。最終章において第2のレポーターが語る“Let them all rest. They were trying to do what they had to do, with what they had to do it with, the same as all of us only maybe a little better than us.” (P, 298.) やシューマンの父親が語る“… I told you nobody is born anything, bad or good God help us, anymore than anybody can do anything save what they must…” (P, 315.) のように人は力いっぱい生きるのみなのだというロマンチックな発言は、これらの記号化されたライティングに対する抵抗となっている。

4

『パイロン』と『アブサロム!』には基本的な構図上及びモチーフ上の相似点が多々ある。同時に相異点も多々ある。『パイロン』は、レポーターを中心とする物語と飛行士を中心とする物語の二つの物語の合成的な要素をもち、レポーターはジグズやハグッドをフォイルとしている。又、飛行士たちの物語はラヴァーンを中心とする二重婚の物語で、この人物たちにレポーターは興味を抱いている。ただこのレポーターの関心は極めて個人的

なものであり、しかも彼には過去（生いたち）、共同体とのしがらみ、人物造形（及び名前さえ読者に対しては）が欠落している。いわば一個の視点、一つのコマにすぎない。

一方、『アブサロム！』はクエンティンの物語とサトベンの物語だが、いずれも過去や共同体、（強烈な）個性がある。二つの物語のつながりは同時性においてではなく、一方は過去の、しかも神話化されつつある物語である。クエンティンはサトベンの物語に直接参画しているわけではなく、一定の距離をとっている。特に前半部におけるクエンティンは聞き手に終始して、彼以外の人物が異なった角度からサトベンの物語を物語るのを読者と同様に耳にしている。二重婚というモチーフは同様だが、それへのこだわりより更に深刻な異人種混交や近親相姦的なモチーフがこの物語にはとり入れられている。構図としては似通った点を共有しながらもこの二作品にはこのように当然ながら微妙な相異がある。

しかし一番決定的な相異は、認識の対象であろう。クエンティンの認識するものは過去の力である。その過去が現在にいかにか連綿とつながって存在し、現前しているかという認識である。一方、レポーターの認識するものは、過去から切り離された現代世界である。しかも飛行士たちという根なし草で孤立した永続しない（ephemeral）現象の認識である。それを比較的単純な語りの方によって、しかもほぼクロノロジカルな時間構成を用いて展開しているのが『パイロン』という小説である。同時代という設定、対象が飛行士たち、主たる認識者がレポーター（主たる語り手は外部の客観的ナレーター）というこの作品と、歴史的な設定、対象は毅然とした一族、語り手は過去の重圧に苦しむ青年、しかも他の複数の語り手も参加する語りの響宴という点で『アブサロム！』は対照的である。

『パイロン』と『アブサロム！』との共通のへその緒は、いずれもが“ragtag and bobend”（P, 289；A, 303）を物語として織りなしていることだが、前者が“of touching and breath and experience”という直接的で経験的、視覚的なものから物語を紡ぎ出しているのに対して、後者は“of listening and hearing”と間接的で歴史的なものを音声的なものを主軸として再構成しようとしているという明瞭な相異点がある。この点についてグレッセは、作者は『パイロン』を書くことによって視覚の幻想を取り除き、『アブサロム！』では言語に専念できたのだと述べている。この指摘は的を得ていると言えるだろう。

『アブサロム！』執筆に際しても彼を悩ませていたであろうライティングというものの陥りがちな断片的、表面的、閉塞的傾向というものを、その典型として表出していると思われる現代的な状況——即ち現代、都市、新聞記者、飛行士等——において追求していただくことで作者がその限界に気付き、再び『アブサロム！』に戻る活路を、語りの多層化、クエンティン・コンプソン青年を語りの主要人物として置くという点に見出したとしたり、『パイロン』という小説を書くというこの気分転換は大いに収穫のあったものとなったと言えるであろう。

注

- 1) William Faulkner, *Pylon* (The Corrected Text) (New York : Vintage Books, 1987) をテキストとして用いた。本文中での引用は *P* のあとにページ数を記した。
- 2) Hyatt H. Waggoner, *William Faulkner : From Jefferson to the World* (Lexington: University of Kentucky Press, 1959) , p. 121.
- 3) 花本金吾『フォークナー研究——主題の追求——』(東京:学書房, 1970), p. 194.
- 4) Irving Howe, *William Faulkner : A Critical Study* (3rd ed.) (Chicago : The University of Chicago Press, 1975) , p. 215.
- 5) Edmond L. Volpe, *A Reader's Guide to William Faulkner* (New York : Farrar, Straus and Giroux, 1964) , p. 184.
- 6) Michael Millgate, *The Achievement of William Faulkner* (Lincoln : University of Nebraska Press, 1978) , pp. 138-149.
- 7) Cleanth Brooks, *William Faulkner : Toward Yoknapatawpha and Beyond* (New Haven : Yale University Press, 1978) , pp. 178-204.
- 8) William Faulkner, *Absalom, Absalom!* (New York : Random House, 1936) 以下『アブサロム!』と略す。なお同書よりの引用は *A* のあとにページ数を記した。
- 9) Frederick L. Gwynn and Joseph L. Blotner (eds.) , *Faulkner in the University : Class Conferences at the University of Virginia 1957-1958* (Charlottesville : University Press of Virginia, 1959) , p. 36.
- 10) William Van O'Connor, *The Tangled Fire of William Faulkner* (New York : Gordian Press Inc., 1968) , pp. 88-93.
- 11) Duane MacMillan, "Pylon : From Short Stories to Magic Work," *Mosaic* VII-1 (Fall 1973) , 185-212.
- 12) James B. Meriwether, *The Literary Career of William Faulkner* (Columbia : University of South Carolina Press, 1971) の "sending schedule" によれば, "Point of Honor" というタイトルで, March 7, 1930の日付が見受けられる。(p. 173.)
- 13) 同じく, Dec. 16, 1930に *Scribner's*へ送付。(p. 171.)
- 14) 同じく, March 5, 1930に *American Mercury* へ送付。(p. 169.)
- 15) 同じく, April 23, 1931に *Woman's Home Companion* へ送付。(p. 171.)
- 16) 同じく, Jan. 9, 1932に Ben Wasson へ送付。(p. 175.)
- 17) Joseph Blotner (ed.) , *Uncollected Stories of William Faulkner* (New York : Random House, 1979) , pp. 642-664. ただし書かれたのは1932年ころ。(p. 711. Notes 参照.)
- 18) Joseph Blotner (ed.) , *Selected Letters of William Faulkner* (New York : Random House, 1977) , p. 85. 1934年10月18日頃の手紙にこの物語についての言及がある。
- 19) 大橋健三郎『フォークナー研究2』(東京:南雲堂, 1979), p. 126.
- 20) これは実際にはルイジアナ州ニューオーリンズ (New Orleans, Louisiana) とシューシャン空港 (Shushan airport) をモデルとしている。この物語のように空港の開港に伴う曲芸飛行や事故にも実際のモデルがあり, この件については, ミルゲイト, ブルックス, ウィッテンバーグらが詳しく実証している。

- 21) Olga W. Vickery, *The Novels of William Faulkner : A Critical Interpretation* (Baton Rouge : Louisiana State University Press, 1964) , pp. 151-152.
- 22) 花本, p. 192.
- 23) McMillan, 211-212.
- 24) Hugh M. Ruppensburg, *Voice and Eye in Faulkner's Fiction* (Athens : The University of Georgia Press, 1983) , p. 78.
- 25) Brooks, pp. 190-195.
- 26) Millgate, p. 143.
Ruppensburg, p. 73.
Judith Bryant Wittenberg, *Faulkner : The Transfiguration of Biography* (Lincoln : University of Nebraska Press, 1979) , pp. 131-132.
- 27) Joseph R. McElrath, Jr., "Pylon : The Portrait of a Lady," *Mississippi Quarterly* 27 (Summer 1974) , 277-290.
- 28) Richard P. Adams, *Faulkner : Myth and Motion* (Princeton : Princeton University Press, 1968) , p. 99.
- 29) 大橋, p. 146.
- 30) Michel Gresset, *Fascination : Faulkner's Fiction, 1919-1936* (Adapted from the French by Thomas West)(Durham : Duke University Press, 1989) , p. 246.